

「去年今年(こぞことし)貫く棒の如きもの」

県教育庁教育次長 久保田範夫

今回の文章は、年度が変わって1か月半が過ぎてやや時期遅れの感は否めないこと、また、4月に県立学校の校長先生方に話した内容と重なることもあり、別の題材にとも思ったのですが、私たちの今年度への思いを伝えたいと考え記したものです。

本県は被災した他県と違って、原子力事故が未だ収束せず、臨時休業中の小・中学校が12校、サテライト校での授業を継続している高校が8校、聾学校平分校~~平養護学校~~敷地内の仮設校舎で学ぶ富岡養護学校があるなど、基本的に緊急・非常時の状況が続いていますが、多くの学校と県民は少しずつ平常時へ戻りつつある中、新年度になった4月初旬、高浜虚子(たかはまきよし)(注)の「去年今年～」という句を私は思い浮かべました。

去年から今年にかけて、何か棒のようなものが一本貫いているという、実に簡潔かつ映像を喚起する力を持つ句であり、元々「去年今年」は新年の季語で、新たな年を迎える句です。この「棒」は「個人の生活信条や信念」或いは「一貫性のある時の流れ」と解釈されており、「まっすぐで変わらない確固たるもの」という印象を与える言葉です。

毎年、大小様々な事件や出来事が起きても、平成23(2011)年以前であれば、この「棒の如きもの」が大きく歪んだりすることは通常無かつただろうと考えられますが、3.11の大震災前後では、この棒の質そのものが変わってしまったとも言えるのではないのでしょうか。

私は、昨年10月末の県教委メールマガジンに次のような趣旨の文章を書きました。

「『日本は、そして世界はこのままでよいのか、どう在るべきか』という非常に大きな難問に立ち向かっていく出発地点に立った私たちは、この本質的な難問にこの先ずっと、正面から向き合っていく必要があるのではないか。」

大震災後の我が国では、国のエネルギー政策の見直しという大きな問題から、私たちの防災・省エネ意識に基づく生活スタイルの変化等、大小様々な変化が見られます。私たちの生活レベルの変化は、何年か経つと元に戻ってしまうかも知れません。いや、事故から1年2か月の現時点においても、地域によっては、事故など無かつたかのような暮らしも垣間見えるのが現実です。

教育に関してはどうでしょうか。確かに、防災・減災教育や放射線教育等、変わらざるを得ない部分もあるでしょう。しかし、「福島県の子どもたちのために、知・徳・体をバランスよく育む」という点は、震災前後に関係なく変わらないはずです。私たちは、福島未来を担う子どもたちのために教育環境を整えて、困難な状況に立ち向かい、乗り越えていくために必要な「生き抜く力」を身に付けさせるに足る充実した教育内容を用意しなければなりません。特に、「復興元年」と言われる今年は、大震災後の混乱により学力や体力等の低下を懸念する声も多く聞かれることから、道徳教育の充実、体力

の維持・向上はもとより、理数教育の充実を含め確かな学力を育む取組を着実に進めていく必要があります。この「棒の如きもの」は、さらに太くなることはあっても、決して曲げたり細くしたりしてはいけなし、より質の高いものにしていく必要があると私は考えます。教育委員会と教育事務所、そして学校、地域、家庭が力を合わせて取り組んでいきたいと考えますので、よろしくお願いいたします。

ところで、歌人西行の詠んだ歌に次のようなものがあります。

○ よられつる野(の)も狭(せ)の草のかげろひて涼しく曇る夕立の空(新古今集所収)

(照りつける強い日射しのために) よじれて(細くなって) いる野原一面の草が急に陰って、涼しく曇り、夕立がやって来そうな空模様だ、という歌意ですが、夕立の来る直前の涼しげな感じを生き生きと表現した「生動感溢れる叙景歌」(久保田淳氏)です。

例年であれば、好ましい情景と受け止められるのですが、今年5月6日、関東地方を襲った巨大竜巻の映像を私たちは目にしています。巨大地震と大津波、季節を選ばなくなった豪雨、そして巨大竜巻……自然のリズムが大きく崩れているのでは、と思わせる現象が続きますが、一方で今年は、自然の大スペクタクルを楽しむこともできます。5月5～6日にかけて、月が地球から最も遠い時より大きさが14%、明るさは30%増すスーパームーン現象(因みに、去年は震災直後の3月20日)、5月21日の金環日食は、中通りでは残念ながら雲に覆われていましたが、全国各地で観測されるのは平安時代(1080年—~~平清盛が病死した1年前~~)以来という、すばらしい天体ショーが展開されましたし、6月6日には、金星が太陽面を通過する「日面通過」現象も観察できそうです。神秘的な自然現象から力をもらいながら、一方で、厳しい自然と故郷福島県を取り巻く厳しい環境に向き合っていかなければ、との思いを強くしています。

(注) 高浜虚子(1874—1959)

正岡子規に終生兄事した俳人・小説家。季題・定型の尊重と客観写生・視覚描写を主張し、昭和初期の「花鳥諷詠論」により、ホトトギス派の伝統俳句を支えました。

<教科書に採られている主な句を紹介します>

- 白牡丹(はくぼたん)といふといへども紅(こう)ほのか
- 流れ行く大根の葉の早さかな      ○ 遠山に日の当りたる枯野かな
- 桐一葉日当りながら落ちにけり      ○ 彼一語我一語秋深みかも